

国際開発研究フォーラム

FORUM OF INTERNATIONAL DEVELOPMENT STUDIES

研究論文 ARTICLE

福井市蒲生町^{がも うちょう}の訪問者行事「アッポッシャ」研究

——その特徴と伝承の現在——

塩瀬 博子

A Study of “Appossha” Which Calls on the Children in Gamo Town (Fishing Village),
Fukui City:

The Features of the Traditional Event and the Present State

Hiroko SHIOSE

48-2

名古屋大学大学院国際開発研究科

GRADUATE SCHOOL OF INTERNATIONAL DEVELOPMENT
NAGOYA UNIVERSITY

がも うちょう 福井市蒲生町の訪問者行事「アッポッシャ」研究

——その特徴と伝承の現在——

塩 瀬 博 子*

A Study of “Appossha” Which Calls on the Children in Gamo Town (Fishing Village),
Fukui City:

The Features of the Traditional Event and the Present State

Hiroko SHIOSE

Abstract

There are lots of traditional events related to “Raihoshin” (来訪神) in local areas in Japan. The notion of “Raihoshin” is the god coming out wearing ONI (鬼) (symbol of evil) mask from another world in the turn of the seasons. So far, Raihoshins have been supposed to be a kind of the souls of ancestors or gods of the year, and bring us happiness and a good harvest. Now their role turned into the education for children.

“Appossha” is said to be one of the Raihoshin events. However, this study points out that Appossha is different from other Raihoshins. Its actions and clothes show the ogre of Appossha had been victims of sea disaster, neither ancestors nor gods. It originated from people’s trauma and extreme fear of its behavior like kidnapping.

Now, the villagers stopped it because of changing values and circumstances. I hope that regional-rooted tradition will be passed on by young people with their memory of Appossha in their childhood. It’s possible for them to inherit event memories.

1 はじめに

2月6日、1年で最も寒さが厳しい時期の夜7時過ぎ、静まった海辺の村通りに「チーン」という金属音¹が響く。その音は冷たい空気を破るように、少し時間をおいてまた鳴らされる。不気味さを伴った鉄漿の音がだんだん近づくにつれて、いきなり家の玄関戸がガタガタと大きく揺すられ、ウォーという唸り声とともに戸が開けられる。口が耳まで裂け、長い髪を垂らし^{さきおり}た真っ赤な鬼のようなアマメさん²がサックリ(裂織作業着)を着け、

図1 アマメ（アモメ）さん（アッポッシャ）



*アイザック外国語スクール名古屋校 日本語非常勤講師

子どものいる部屋にぞろりと無言で這い上がる。それまで遊んでいた子どもは恐ろしさに「ギャーッ」と叫び、大泣きしながら震えて親にしがみつくと、「アママさん」が子どもに近づいてとりつく。

次に親は子どもを怪物の方に突き放すが、その恐怖の瞬間、「お利口にする?」「お片付けする?」と子どもに問いかける。子どもは鬼から離れようと、涙と涙で顔をひきつけてガタガタと震えながら「うん、す、するー!」とやっとのことで泣きながら答え、鬼の腕から離れて親の腕の中に顔をうずめる。家人が餅を投げると、怪物は黙ったまま這って後ずさりをしながらその家を後にする。

図2 子どもをおどすアップощシャ



上記は2012年2月6日福井市蒲生町で、筆者が実見した旧正月前（2月6日）のむいかどし³の行事、「アップощシャ」⁴の様子である。越前海岸に面した蒲生町は市町村合併以前に越廼村と呼ばれていた地区に属する一海村である。この地区一帯ではナマハゲ⁵に似た年中行事・「アップощシャ」が伝えられ、幾度かの中断があったものの、2012年まで実施されていた⁶。

研究対象地の蒲生町は国定公園の越前海岸中央から北寄りにある海沿いの地区である。住民の主な生業は漁業で生活の多くが海に依存。海岸からすぐに300～600m級の山々が迫る地で、農地は極めて少ない。人口約471人。少子化が進み、現在0～4歳は8人、5～9歳は13人（2014/12/1現在）。

図3 研究対象地



(出所) <http://www.sekaichizu.jp>
より筆者作成 2015/7/28 取得

図4 福井市蒲生町付近地図



(出所) <http://map.goo.ne.jp/map.php?MAP> より
筆者作成 2015/7/28 取得

この地区における訪問者は「アマメさん」または「アモメさん」と呼ばれ、旧正月の年越・六日ごしに行われていた。この行事名アッポとは丸餅のことで、アッポ欲しや、から転じて「アッポッシャ」になったという。

福井県においては6か所の報告がある⁷。そのうち5つはナマハゲに類するもの、残り一つはオドシという仮面を伴わない行事である。しかし、現在（2015）でも実施されているのは1ヶ所のみ（福井市白浜町⁸の「アマメン」）で、その他は消滅している。

このような小正月⁹または季節の折り目における訪問者行事は日本各地において見られるものであるが、伊藤幹治によると図5のような分布となっている（伊藤 1963：108）。

この図から、研究対象「アッポッシャ」はナマハゲ系に分類され、それらは東北・北陸地方の海沿いに点在することが確認される。

年越と称する年の境目の夜に、仮面や仮装を伴って各家々を訪問する人々は「小正月の訪問者」、

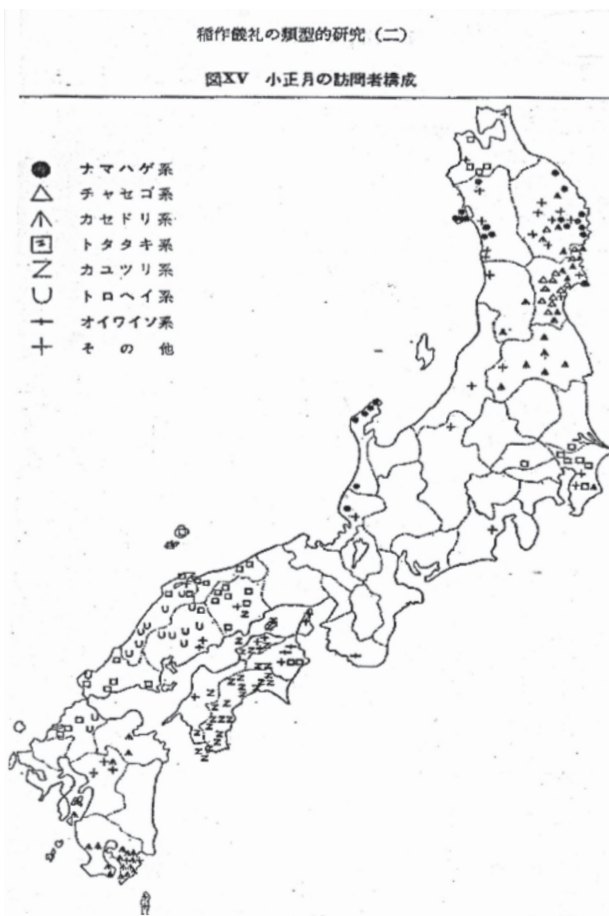
「来訪神」、「おとずれ神」などと呼ばれ、多くの研究がなされてきた（伊藤 1963；下野 1978；大場 2004 など）。また、そのなかでもナマハゲ系の訪問者行事は、「東北日本に局地化していて、他系列群とは分布構造を異にしている」（伊藤 1963：109）ため、地域的な側面から探求された研究も数多い（小倉 1967；Yamamoto 1978；青木 1983, 1990；鎌田 1999；稲 2005 など）。

本稿は伊藤による図5の分布図上、ナマハゲ系分布地域において最南端（日本海側地方）に位置づけられるこの行事について、地域性や風土を土台にして考えるものである。おもに次の3点を課題として論じていきたい。

①文献から本行事の様相を通時的にとらえる。

②他地（秋田県男鹿と能登、福井市白浜）との比較により当行事の特徴を明らかにする。それを踏まえたうえで、何故この地に当伝承が生成され、継承されていったのかを考察する。

図5 伊藤（1963）による小正月の訪問者構成



（出所）伊藤. 1963. 「稲作行事の類型的研究」：108

③この伝統行事は継続→休止→再開が幾度か繰り返されている。継承の跡を辿り、なぜ2012年で停止となったのかを、県内で唯一存続している白浜の行事と較べることにより、その要因を考える。

また、高桑守史の唱える「伝承主体」(高桑：1998)という観点に立ち、行事の担い手や地域の人々の聞き取りから伝承の共時的側面を明らかにする。伝統継承には地域の担い手の問題や地域および社会状況と密接な関わりがあるが、消滅例の多いこの類の行事について、伝承主体や地域住民からの視点で論じられた研究は限られている。湯川洋司は「民俗の消滅とは旧来の民俗の形(中略)も観念も消失することを指すが、ただ観念の『記憶』が『主体』にとどまる限り、それはいつ復活するかもしれない、この状態をとくに民俗の潜在化と呼んで区別することができる」(湯川1998：94)と述べている。伝承は場にいる主体によって変化し動いていくものである。後半部で伝承者、地元の人の語りに注目しながら、動きつつある伝承の現在を見ていくこととする。

2 「まれびと」と「来訪神」の定義、及び小正月訪問者行事の分類紹介

本論に入る前に当研究対象の背景となる用語、小正月の訪問者―「まれびと」と「来訪神」についてその定義を述べた後、伊藤による小正月の訪問者行事の分類を紹介する。

定義

「まれびと」とは折口によれば、古くは神を斥す語で、常世から古代の村々に時あって来たり臨んで村人の生活を幸せにして還る霊物である。その極めて珍しい訪問を待ち望み、尊び、畏れる感情をまれびとなる語を以て表わしたもの(折口 1975[1929]:5-32)とされる。また、「来訪神」とは「異界からこの世へ定期的に現れ来る神。その一つの形態が、秋田県男鹿半島のナマハゲ、(中略)、沖縄県八重山諸島のアカマタ・クロマタなどの来訪神である。(中略)季節の変わり目に、穀物の豊穡や人々の幸福をもたらしに訪れるとされている。一般に来訪神は祖霊信仰や年神の枠組みでとらえられることが多いが、ナマハゲの由来譚に、漢の武帝と鬼の飛来、異邦人の漂着という伝承もあるなど、その性格は多用である。また来訪神は款待と畏怖(排除)を伴ってむかえられる(後略)」(『日本民俗大辞典』項目「来訪神」：792 川崎史人記述)。

上記よりまれびとと来訪神の違いは、前者が人から到来を待たれるという肯定的な意味合いを持って観念的に表わされるのに対し、後者はより具体的な形をとって語られ、否定的側面も併せ持つ点が異なる。上述の定義をもとに小正月の訪問者＝来訪神という関係から、その二面的な姿に注目して考察を進めたい。

小正月訪問者行事の分類

伊藤は水稻の基本儀礼に内在する予祝性に注目し、稲作・畑作のシンボリックな模擬行為として小正月の訪問者を取り上げたが、それを次の8系列に分類した(伊藤 1963：101)。

ナマハゲ/チャセゴ/カセドリ/トタタキ/カユツリ/トロヘイ/オイワイソ/その他

この分類で「アッポッシャ」はナマハゲ系に属するが、そのなかの例示¹⁰には名称がない。それらはほとんどが注5で示したように、囲炉裏に長時間当たるとできる「火ダコをはぐ」という語源である。加藤和夫によると、『あまめ』は中央語（京都語）として、鎌倉時代の辞書『名語記』などにも登場する古い言葉で、『あまみ』『あまんぼ』『あまびれ』など、様々に形を変え、全国に広がった」（『北国新聞』2014.1.30 朝刊¹¹）という。続いて「秋田県の『なまはげ』の名称も火ダコを意味する『なもみ』からきているとされる」とある。語頭の母音の後にm, nなどの鼻音が続くとき、語頭の母音が弱くなるか抜け落ちて「amame-hagi」→「mame-hagi」となるが、m, nの発音は共に鼻音で調音点が近い。そのため、「mame-hagi」→「name-hagi」→「nama-hage」となった、あるいはそのように聞こえて広がったと考えられる（また「gi」と「ge」は後者のほうが調音の負担が少ない）。

伊藤はこれらナマハゲ系訪問者について、その分布が秋田県の男鹿半島を中心に岩手・青森・石川県能登半島など、東北地方に局地化しており、他系列群とは分布構造が異なる、と指摘している（伊藤1963：109）。

3 「アッポッシャ」に関する文献

当行事の変遷や特徴を見るために、文献を次に紹介する。その後全体を概観し、考察を行う。

3.1 伝説紹介

【文献1】『福井県の伝説』（1935）

越廼村 アッポチャ（蒲生 栄崎）

舊暦正月六日（今は新暦二月六日）にはアッポチャきゅうと稱して、十二歳より十五六歳の男女が頭にソウケ（ざる）をかむり、顔に墨、紅などを塗り、サックリを着け、手に茶碗、鍋釜等を持ち石を打ち鳴らしながら、子供のある家を廻って、子供を連れて行くと威嚇する。子供達はアッポ（草餅）を貰あたへて難を避ける。かうして日暮から餅を貰ひ歩く風習（後略）。

これは昔、蒙古人が此の海岸に漂着して、此の村を廻って子供をさらって行ったから起こったとも、大メグリ¹²と云ふ岩からアマメヤサンが出て来て、子供をさらって行ったから起こったとも云はれてゐる。アマサン或いはアマメヤサンがアッポを貰ってあるくので、アッポチャと云ふ様になったとも云っている（後略）。

管見の限り、文献のなかではこの記述が一番古い。定義にもあったように行事の起源は漂着者であり、子どもをさらうという究極の恐怖の伝承が綴られている。

【文献2】「正月行事座談會」『南越民俗』第二巻第二號（1939）

（丹・越廼・加茂）（中略）昔、海岸の大ぐり（大岩）の下にあもめさんといふ者が住んでいて、毎年六日ごしになると、このあもめさんが岩の下から村へ上がって来て、村の子供達さらを攫っ

て行ったといふ伝説がある。それに因んだものか、最近^{すた}廃れた行事の一として、舊正月六日の晩、このあもめさんに扮した子供達が、さうけ^{ざる}（箆）に金・銀の紙を貼り、それに恐ろしい目・鼻口などを付けたものを冠って、茶釜の蓋を叩きながら、「アポッチャ ヌ」と唱えつゝ子供のある家へ家へと乗り込んで行く。すると其の家ではあもめさんに子供を食はれてはいふので、夫々に餅を與へて追ひ歸すといふことがあった。但しこの行事は村の小學校から差止められて行はれない様になってる（後略）。

文献内容は文献1とほぼ同じであるが、学校からの行事禁止が記述され、この歳時習俗に中断時期のあったことがわかる。

【文献3】『越廼村の年中行事 あっぼっちゃ 資料』（1983）

ここには地元出身の青木捨夫氏（1925年生まれ）が1973年に複数の地域住民から採録した話が収められており、口碑ともいえる。この私資料から三つの話を紹介する。

あっぼっしゃ 第一話（伝説と行事）

（前略）今から何百昔年昔のことか分かりません。

ある時、新羅（朝鮮）人か蒙古（モンゴル）人かの乗った舟が、荒れ狂う冬の日本海で遭難してしまいました。乗っていた人は海へ投げ出され、壊れた舟板につかまりながら雪の降りしきる越廼の海岸へ打ちあげられました。（後略）人家の方へ、よろめきながらやって来て、家の戸を力なくたたき倒れてしまいました。

家の中では（中略）お正月（旧正月＝今の二月）なので（中略）芋や餅を焼い食べていました（後略）。海からあがった人は（中略）はうようにして戸を開け、家の中に入っていました。この姿を見つけた子どもたちは「ぎゃっ」と悲鳴をあげ、母親にしがみついて泣きだしました。（後略）顔は真っ赤に見え、振り乱した髪の毛からは水がしたたり落ちて（中略）ずたずたに破れた着物には、見たこともない異国の模様が描いてありました。（後略）家の人はそばにあったばた¹³を投げてやりました。（後略）子どもたちはその後ずっと恐ろしい気持ちちが抜けなかったそうです。

村の人はこの人を「あっぼっしゃ」「あっぼっちゃ」と言うようになりました。この日は正月（二月）六日の夜だったそうです。

あっぼっしゃ 第三話

（前略）日本海はたいへん^{しげ}時化けてきます。（後略）こんな日の夜になると、蒲生の海岸から100メートルほど沖の方にある「おおぐり」という島の横の深い深い海の（中略）奥底にある「おおぐりの釜」の蓋が静かに開いてくるそうです。そして真っ暗な釜の中から、髪の毛を波にもまれながら目をひきつらせ、耳までさけた口は人を食ったように赤く、頭には二本の角が生えている、「あもめさん」（中略）がそろりそろり出てくると（中略）さらっていっ

た子どもは、おおぐりのかまの中で食べてしまったということです。

あっぱっしゃの年中行事

江戸時代ごろからでしょうか、二月六日を「むいかどし」と言って、あもめさんが、「あっぱっしゃ」「ゝ」と言いながら夜中になるまで子どもをさらいに来るという行事が、蒲生やぐんざき 菜崎に伝わっていました。そのやり方は村の若い衆が二、三人で一組になってやりました。米あげそうけ（ざる）に赤い紙を張り、金紙の目玉やニンジンなどで作った角を生やし、海藻の髪の毛をぶら下げた「あもめさん」の面を作ります。それを顔にかぶり、破れたサックリを着て、子どものいる家を回って歩きます。

手に持った茶釜のふたを「チーン、チーン」とたたく音が静かに響いてくると、（中略）茶釜のふたをたたく音が聞こえてきたとたん、真っ青になって母親にしがみつ、泣き声さえ立てません。（後略）それから後、「あっぱっしゃが来るぞ」と言う、どんなにだだをこねている子どもしゅんとしておとなしくなっていました。この年中行事も終戦（昭和20年）後、食料不足などですたれてゆき、今の子どもたちはあもめさんという言葉も忘れてしまいました。

参考

越廼村、（中略）の三〇才以上の人は誰でも知っているので（中略）話をしてくれた人は代表者だけで省略

代表 〇〇 明治三二年 七四才

これらの採話は話者の年齢から1900年代初め頃の言い伝え内容であると推定される。訪問者の由来に遭難者と海底の怪物双方の記述があり、それに対する怖れが子ども自身の自戒を促す記録が見える。「誰でも知っている」とあることから、行事の特殊な由来が地元で語り継がれていたことがわかる。

【文献4】『越廼村誌』（1988）

六 習俗

あっぱっしゃ

あっぱっしゃともいう。口碑伝説によれば、昔大陸からの渡来人が蒲生海岸に漂着した。異様な風貌から村人たちは恐れた。このことと、マレビット信仰の一つ小正月の訪問者とが重なって年中行事化したもので、江戸時代より行われているといわれ、仮面をアモメさんともアマメさんともよぶ。（後略）家族は子どもの平素のいたずらをたしなめ、アッポ（餅）を与え許してもらう。昭和四十年頃に途絶えたが、昭和五八年に青年たちによって復活された。能登のあまめはぎ・秋田のなまはぎと共通する面がある。

習俗の起源が渡来人の漂着であることが記されており、日本海岸地方で共通した行事のあることが書かれている。

3.2 文献（口碑を含む）による考察

表1は3.1で紹介した伝説、文献資料の内容を年代順に各事項別にまとめたものである。

表1 文献（含口碑）による記述内容一覧

	文献1	文献2	文献3	文献4	
1 文献名	福井県の伝説	南越民俗	あっぱっちゃ資料第一/三話	あっぱっしゃの年中行事	越廼村誌
2 記述年	1935	1939	1973（語り内容は1900年代初め頃か）	同左	1988
3 初めに出て来る場所	大ぐりと云う岩	（大ぐりの）岩の下	おおぐりの奥底の釜の中		
4 訪問者役	十二より十五六歳の男女	子供達		若い衆	昭和58年（1983）から青年達
5 訪問時の扮装	ざるをかむり/顔に墨、紅/サックリ	（ざる）に金・銀の紙を貼り、恐ろしい目・鼻口などを付けたものを冠る	顔は真っ赤/振り乱した髪/破れた着物に異国の模様/耳までさけた口（赤）/角	ざる（赤い紙、金紙の目玉、角、海藻の髪）を顔に/サックリ	鬼面とさっくり
6 訪問時の持ち物と鳴らし方（随行者）	茶碗、鍋釜/石を打ちならし	茶釜の蓋を叩く		茶釜のふたを「チーン」とたたく	
7 訪問時の唱え言	「子どもを連れて行く」	「アポッチャ」	「あっぱっしゃ」	あっぱしゃ	
8 訪問する家への入り方		乗り込んで行く	玄関の戸をガタガタゆり動かし/はいながら		
9 訪問される側の親や子どもの心情・行動	子供達はアッポを与えて難を避ける	あもめさんに子どもを食われてはといふので餅を與へて追ひ歸す	親はばたを投げ/子はずっと恐ろしい気持ちが抜けなかった	子どもは真っ青になって母親にしがみつ	家族は子どもの平素のいたずらをたしなめ、アッポ（餅）を与え許してもらう

10 継続・消滅に関する記述		村の小學校から差止められて行はれない様になって久しい	現在はまだ行われていない	終戦後、食料不足ですたれてゆき	昭和四〇年頃(1965)に途絶えたが、昭和五八年に青年たちによって復活
11 起源その他	漂着者/アマメヤさんが子どもをさらって	あもめさんが岩の下から村へ上がって来て、村の子供達をさらって	新羅人か蒙古人かの乗った舟が遭難/さらった子どもは食べてしまった	江戸時代ごろから	昔大陸からの渡来人が蒲生海岸に漂着、それとマレビト信仰小正月の訪問者などが重なって年中行事化/江戸時代～

(出所) 筆者作成

この表から見出されることは以下の5点である。

- ① 伝承行事形態に多少の変化や多様性が見られること
- ② 伝承の意味、本義に変化が認められること
- ③ 当訪問者行事が2の定義で述べられたうちのナマハゲ由来譚のうち、「異邦人の漂着」という起源を思い起こさせる記述が複数認められること
- ④ 出現場所として大ぐりという岩礁の名と、子供が被害を被る記述が見られること
- ⑤ 行事の継続困難要因が度々報告され、それが時代背景すなわち当時の社会状況を反映していること

まず①を見ると、行事の訪問者役は少年少女→青年へと変化。面については口碑に角をつけたとあるので、面は鬼の面であったと解される。また鳴り物は茶碗、鍋釜、茶釜と混淆しているが、青木は「茶釜の蓋」と記述、実見した時もそれであった。これは口碑第三話の「おおぐりの釜の蓋」という言い伝えに呼応していると受け取れる。海底の釜の蓋が開き、鬼のような化け物が出て来ることを知らせるために茶釜の蓋を地上で鳴らす。不気味さを伴う静的な音響という点で他地とは異なりを見せている。

次に②について考察すると、当伝承の解釈として、当初アマメさんが「人食い・人さらい」という恐怖の対象→たしなめ・おどしにより子を戒める存在へと変わっていったことが認められる。そして餅の機能も、当初の「子どもを守るための餅」→「恐れによる子どもへの教育的役割行動を早期に終了させるための餅」と役割が変化している。

③について、本行事は「異邦人説」を思わせる言い伝えや記述が濃厚である。海流の関係でいまだに多くの漂着物・者が多いこの地域の状況¹⁴を反映している。

④の大ぐりであるが、ここはかつて流れ物がよく着いた大礁で、その岩礁右側水深6メートルの所に縦横2×5メートルの大穴があり、その底に畳半畳大の鉄板状の敷石(厚さ約40センチメートル)が沈んでいたという。難破船の一部では、とも言われており¹⁵、海底に開いた不気味な大

穴と敷石が、化け物の住む釜や蓋と結びついた可能性がある。

⑤からはこの行事が細々と続けられており、現在に至るまで行事継承の中断と復活の繰り返しが認められ、その理由も学校からの差止めや食料不足など時代的な社会背景と関わっていたことがわかる。

4 「アッポッシャ」の特徴

4.1 他地域（能登／男鹿地方）ナマハゲ系行事との比較

青木は研究対象地・蒲生町で生まれ育ったが、その特徴とその原型について「漂着神考」のなかで考察分析を行った（青木1990：15-16）。それによると、日本海各地におけるその訪問神行事は能登地方にアマメハギ、新潟にアマメハゲ、山形でアマハゲ、秋田にナマハゲ・ナゴメハギがあり、福井市白浜ではアマメン、越廼村^{こしの}ではアマメ・アモメと言われている。1984年実施状況を独自に調査した結果¹⁶、アマメと類似する用語や行事は越廼村以北であり、以南のホトホト・トイトイ他（島根）、カセドリ（佐賀）、トーシモン（長崎）は用語に共通性がなく、行事内容も異なる、と述べた。

また「アッポッシャ」の特色として、①海から来る ②^は逼う ③大声は出さない ④刃物などは持たない ⑤神社とは無関係である、という点が挙げられている。アマメが北上するにつれて変化、ナマハゲになるまでの各県の呼び名や発声、立ち振まい、神との関わりが変化して行く、と述べている。

また彼は、越廼村（福井県）、能登（石川県）、男鹿（秋田県）の3つの訪問者行事の比較を行っている（青木1983：2）。表2はその比較表である¹⁷。

表2 青木によるナマハゲ系訪問者行事の比較表

	越廼村蒲生菜崎	能登（石川県）			男鹿（秋田県）	
呼び名	あっぱっしゃ	あまめはぎ			なまはげ	
訪人	あもめ（あまめ）	鬼			鬼　歳神	
仮面	鬼	門前	天狗	鬼	猿	鬼
		内浦	鬼			
持ち物	なし 従者　釜のふた	門前	のみ	すりこぎ	かなづち 金鎚	手桶　包丁
		内浦	棒　包丁			
期日	二月六日　夜	一月六日 ¹⁸			十二月三十一日 ¹⁹ 夜	
服装	さっくり	みの			みの	
来る所	海より（はう）	（歩く）			山より（歩く）	

（出所）青木捨夫『越廼村の年中行事 あっぱっしゃ 資料』1983：2²⁰

4.2 近隣地域（福井市白浜町）行事との比較

次に「アッポッシャ」と現在福井県において唯一実施されている福井市白浜町の「アマメン」とを比較する²¹。

表3 越前海岸海村における「アッポッシャ」と「アマメン」比較

	福井市蒲生町	福井市白浜
① 行事の呼び名	アッポッシャ	アマメン
② 伝えられている出現場所	海から	(神社)
③ 訪問者名	アモメ (アマメ)	アマメ (ン)
④ 訪問者役と人数	青年団 5人	中学生以上 4人
⑤ 主催	サークル	青年会
⑥ 仮面	鬼 (サークルメンバーが箆に目鼻口をつけ作成。顔面赤色、毛髪はホンダワラ (海藻) で角なし ²² 。数年に一度作りかえ)	鬼 (子供が段ボールで作ったもので、箱にストックされている。角ありで面の色は様々、毛髪無し。面はアマメン役が選ぶ)
⑦ 持ち物	無 従者 釜のふたに鉄棒	無 (聞取りでは、包丁有) 鳴り物なし (聞取りでは有)
⑧ 衣装	さっくり (作業着) 荒縄	蓑 (藁製とシュロの皮) 荒縄
⑨ 訪問時の唱え言	「ウオー」と唸 ^{うな} る→無言	唸り声→「悪い子はおらんかー」 「いい子にするかー」「親の言うこと聞くかー」
⑩ 訪問する家への入り方	這って入る	立って入る
⑪ 子どもにたしなめをする者	子どもの親	アマメン
⑫ 実施日	二月六日小正月 (旧) 夜	二月三日節分夜
⑬ 供応	餅	菓子
⑭ その他		訪問前後に神明神社に参拝 行事終了後鬼役が菓子分け

(出所) 筆者作成 アッポッシャは2012年、アマメンは2013年実施のもの

蒲生町と白浜町はわずか6キロメートル程の距離であるが、実施形態の異なりが見られる。この表によると蒲生町の「アッポッシャ」より白浜町の「アマメン」の方が能登や秋田に近い形を取っている。それは⑧～⑩において、蓑装束のアマメンが子どもへのたしなめを唱えながら立ち姿で訪問する形に表れている。また⑦において聞取り (70歳代) と実際とが異なるのは、かつてそこでは持ち物や鳴り物を伴っていたが、時代に伴い省略されたと考えられる。

また、蒲生町の行事が小正月に大人の有志で行われるのに対して、白浜町のそれは節分に青年会主催で次世代の少年達が鬼役を務める。また後者の行事においては神社が関連している点に大きな特徴があり、節分行事との合体も見られる²³。なお、この二つの伝統行事は県の無形文化財

には指定されていない。

4.3 比較による「アッポッシャ」の特徴と考察

先行研究および、表2・3より比較検討し、研究対象の訪問者行事の特徴をとらえたい。既に青木氏の研究で ①海から来る ②^は逼う ③大声は出さない ④刃物などは持たない ⑤神社とは無関係である、と指摘されているが、さらに付け加えると、⑥蓑を付けない ⑦名称が「あまめ」系ではない ⑧子どもにたしなめをしない、という点があげられる。

以上①～⑧の特徴は、遭難した異国の漂着者の様子を表わすものである。漂着者故に空腹で食べ物求めて歩くこともできずに這うしかなく、それ故に声も立てられない。蓑など付けるべくもなく海でずぶぬれになった髪を垂らして民家に押し入った姿が、アッポッシャの形態に表象されている。それは【文献3】第一話でも語られており、海浜の人々と海の向こうからやって来た異形の人々との接触が幾度となくあったことが知られる。その姿、さらに子どもをさらう行為²⁴は土地の人にとって究極の恐怖であっただろうと察せられ、その怖さ故に「鬼」とされたのである。

小松和彦は「異人」と「来訪神」との違いを次のように説いている。

異人：集団の外部からやってくる物理的存在としての人間

来訪神：儀礼についてあるいは象徴的に表現されるもので、観念のなかでやって来る神

どちらも「富」と「災厄」をもたらすとしたうえで秋田のナマハゲ行事に触れ、子どもにとっては「恐ろしい神」である一方、大人にとっては家々を祝福する「福の神」になる（小松 1977：32-52）、とナマハゲ系行事の持つ二面性を述べる。来訪神観念を多重的にとらえたが、秋田県男鹿半島における「ナマハゲ」に再び言及し、この系統の儀礼の本質について「恐ろしい鬼の来訪」（小松 2000：109）と明言した。その儀礼は祝福のために来る善なる神霊＝「まれびと」または「祖霊」でもなく、恐ろしさに意味がある、と明確に異議を唱えている。

鬼は鬼なのだ、という小松の論はこのアッポッシャにも該当する。『日本書紀』にもあるように、日本では古くからその集団とは異質で恐怖を覚える者、人間と対極に当たるとされる者を「鬼」という語で当てはめた。

青木も「恐ろしいものは鬼、という観念があった。日本では大陸からやってきた人（特に難破した漂流者）を『有角人』と呼んでいた」と述べ²⁵、異邦人の漂着者（特に悪行をはたらく者）＝有角＝鬼、という日本人の観念の図式がそこから引き出せる。また彼は当地における伝承の存在について「遭難した異国の漂着人が食物乞いに各家を訪れたという原型が越廼村に伝承されているようである。日本海沿岸各地に大陸からの漂着人は、史実や伝説となって多く伝わり、現在も遭難者が上陸している。年中行事化したのは、異形の漂着人に恐怖を持った事が日待ち・月待ちや大晦日の行事とくみ合わさり、定着した」（青木 1990：15-16）、と分析している。

海流による漂着神²⁶や漂着の多いこの地における訪問者行事の起源には、異邦人説が色濃く考える。それではこの「アッポッシャ」伝承は、今地元の人にどのようにとらえられ、どのような状況にあるのだろうか。それらを把握するために伝承者への聞き取りを記述する。

5 行事活動の実際と現在の伝承者・地元の人たちの語り

ここでは2012年に実見した訪問者行事の実際と伝承主体という立場から、担い手、また地域の人からの語りを記述する。

担い手のグループ・サークル「灯台」は1960年に途絶えたこの行事を1983年に復活させた。メンバーは5人で、アッポッシャ以外の活動はおもに子供会活動、養護老人ホームのお風呂への温泉源泉水運びなどである。

メンバーの行事への認識は「親の言うことを聞かなかったり、行儀の悪い子にアッポ（アモメさん）が来て子どもの躰をするもの」ととらえられている。

5.1 行事当日の記録（2012年2月6日）

- 18:30 —— 伝習館（公民館）にてサークルメンバーが、お面とホンダワラを倉庫から出す
→髪毛となるホンダワラを面の上部に針金で取り付ける。髪が増えるにつれ、恐ろしさと凄味が加わる。ホンダワラは2週間前に海岸から採集し、乾燥させて使用。毎年その年のものを用いる。お面は数年に一度貼りかえる。
- 18:50 —— 藍色の古ぼけたサックリ、蓑²⁷などを身に着ける。サックリは荒縄で結ぶ。
- 19:00 —— 準備完了、メンバー達が出かける。鉄瓶の蓋を金棒でチーン、チーンと繰り返して鳴らしながら夜道を歩く。静かな夜の海村にその音が不気味に響き渡る。
- 19:10 —— 1軒目に到着。子どもを脅す。
- 19:22 —— 餅をもらったアママさんが這って後ずさりしながら家を出る。

以上が1軒目の訪問の様子である。1軒の訪問所要時間は10分強であった。

5.2 伝承者への聞き取り

(1) 訪問者行事前後（2012/02/06）の伝承者たち

【I氏】男性、1950年生まれ、地元出身、サークル会長

2012年2月6日聞き取り

I氏は、1983年から行事を復活させた地元のサークル「灯台」の会長である。「最初は中学生がやっており、至る所に複数のアッポッシャがいて、『むいか（お）どし』と呼んでいた。グループでは始め仲間で社会教育的なことをやっていたが、息子さんがヤンチャで言うことを聞かないので、「アッポッシャをまたしないか」と仲間を持ちかけ、再開した²⁸。氏は「父はアッポッシャに子どもを投げて厳しく、母はそれに脅された子どもを受け取り優しく、といった家庭の中の役割分担を促し、その絆を深めるのが目的」と語り、次いで「伝統を守るためにやっているのではない」と付け加えた。

【J氏】男性，1957年生まれ，地元出身，サークル内でのアマメさん役

2012年1月26日・2月6日 聞取り

氏によると，訪問するのは保育園児がいる家であり，行儀よくするようにと依頼のあった家だけに行く，とのことである。「子供が少なくなってきたという家自体も少なくなっている。始めは20軒くらい回った。依頼軒数は2011年が5軒，2012年は4軒だった。1軒でもあれば回る。昔は囲炉裏があったから脅かすのも家族全員がいて，その場の役割分担が容易だった。でも今は家族が一堂に集まることは食事以外には少なく子供部屋がある。現在の訪問は希望の家族に事前連絡をしている」と語った。

(2) 行事中止後の伝承者（2013年以降）一行事を止めた理由

実見した2年後再びJ氏に連絡をとると，2013年に「アッポッシャ」は取りやめになった，とわかった。以下は氏の聞取り内容である。

【(再び) J氏】2014年6月19日・6月22日 聞取り

サークルがこの行事をやめた理由として氏は次のように語る。

20年ほどブランクがあった行事を（再開して）20年続けたが，やる側が歳をとってきたことがあるし²⁹，次の世代が育っていなかった。俺たち「灯台」がアッポッシャをやるもんだ，と地域の人に認定されてしまって，有志ということで裾野を広げることができなかった。それと来てほしいという依頼が減ってきた。若い人にも続けていってほしいけど，責任を持ってやっていこうという気持ちや動機が大切で，頼むと人任せになる。誰かが続けてくれるという期待はしているし，もしそれなら後押しはするが，僕らから依頼はしない。

「やらんのか」という人はある。でも，家庭環境が変わってきた。おじいちゃん，おばあちゃんには「子どもを泣かすのはかわいそう，泣かしてまでそんなことせんでいい。頼まんでいい」という人がある。そして今は子どもに悪い子がいない。放ったらかしということがなく手をかけて育てているから，ヤンチャがいない。アッポッシャの役目がない。

だから，俺ら「もういいやろ。齢やから」って，意欲も薄れてきた。特養への温泉水運びは今もやっているけど。

このような社会状況，教育を巡る変化については地域の他の方からも語られている。その一つを紹介する。

【K氏】女性，1932年生まれ，地元外出身

2014年6月3日・11月22日 聞取り

「今は子どもと親の考えが変わってきたから、子どもがびっくりして変になったら困る、という考えがある。昔は『言うことを聞かんから』って言ってたけど、子どもと親の考えが違ってきたんやね、それから家の形態も昔とはもう変わっている。ドアの家が多いからガタガタ音を立てられない」

その後K氏は、筆者の記述したアッポッシャ来訪時の親の問いかけ（2012年の実見記述—1はじめに を参照）を読み、その感想を次のように記された。

「違和感を覚えました。昔は『ちゃんと行儀良くするかー』『親の言うことを聞くかー！ 悪いことせんかー』と、「お片付け～」などとは言わず、あの時代は自分の持ち物すべて（衣服も）少ない時代でしたから」

この記述から時代とともに変化する社会状況と人の意識の移り変わりが読み取れる。当地に嫁がれて永年経つK氏には「お利口」や「お片付け」というたしなめはかつて耳にしたことがなく、なじめない言葉であった。子どもが大勢いた時代、親にとって子どもは「利口」であるよりも、それ以前の言い聞かせを必要とする存在であり、その主体は父親であった。筆者が見た限り、子どもをたしなめる親は4軒とも父親ではなく母親であった。誰がどんな訓戒をするのか、という点においても物が豊かになった世の中と少子化、家父長的な家族の在り方の喪失など、現代社会の変化が反映されている。

5.3 語りからの考察

当行事の継続に当たっては幾度かの休止が見られる。3.2で述べた通り1939年の文献記述では小学校の要請により行事が差し止められて久しいとある。その差し止め理由は不明だが、恐らく戦時中であることと関わっていると思われる。終戦後（1945以降）にも食料不足といった理由で途絶えたことが記されている。この訪問行事伝承は1930年代、1965～1982年、2012～に途絶えており、中断理由は時代の社会状況によって異なっている。

現在の継続困難の要因を考えると、社会的背景として少子化とそれに伴う家族の教育観や家庭住環境の変化が挙げられる。

そして伝承主体側の問題として、上記が原因となる依頼件数の減少、それに付随する伝承主体の行事継続への意義と意欲の減少、伝承者の年齢的問題、また白浜町の行事と比して担い手育成が欠如していたこと等がある。

J氏の言には次世代へのかすかな期待も入り混じっていた。氏の息子さんから、「成人の集い(成人式)でアッポッシャが話題となり、皆が『とても懐かしい』と口をそろえて言っていた」と聞いたことであった。氏は「子どもら（にとって）はなつかしい」と筆者に語ってくれた。

6 おわりに

年越の訪問者行事「アッポッシャ」について考察を行ってきた。本稿は文献からの時間的な全体像把握、ナマハゲ系行事のなかで最南端に位置づけられる当行事の特徴と、伝承の今をとらえ

ることが目的であった。これまでの考察を以下にまとめる。

① 行事の意義

この伝承行事は江戸時代ごろから行われているとされ³⁰、基本的に変わりなく継承されてきた。しかし伝承の意義解釈に関しては変化が見られ、文献からこの訪問者の役割が1980年代より「地域住民の恐怖の対象」から「子どもに教育的役割を果たす者」へと変換している。それは行事において1970年代頃までは単に家人が餅を与えて訪問者を帰すのに対し、サークルの再開時（80年代）から家族が子どもに訓戒をする、という行為に現れる。

② 行事の起源

もともと七日正月前夜の厄払い行事として地域で発生したものが、この地への度重なる遭難者漂着と子どもがさらわれる事件により、訪問者役が異形の漂着者に転化された可能性がある。伝承は究極の恐怖ゆえの記憶の表象である。

またその恐怖が畏敬よりも大であったため、信仰の対象とはなり得ず鬼と結び付き歳時習俗行事として定着した。

③ 行事の特徴

他地域のナマハゲ系行事と比較すると、(②と関連するが)特徴として訪問者の扮装や行動の形に遭難した漂着者を想起させるものが際立っている。そのため、異邦人を神や祖霊と結びつけていないことが大きな特徴である。本行事はナマハゲの3つの起源説のうち、「異邦人説」に当たる口伝や記述を多く残しており、それは根ざした地域がもつ風土性一すなわち地理的環境や海流、また伝説に結びつく事物（大ぐり）の存在などに大きく関わっていた。

④ 行事の現在とその中断要因

当行事は過去に何度か中断されており、現在も含めてそれぞれの社会状況が反映されている。現在の中断要因として、家族構成の変容がある。それは少子化や教育観、家庭環境の変化を生み出し、また伝承に対する住民の価値判断にも影響を及ぼした。一方伝承主体内の問題として、前述した社会的背景に伴う行事執行に対する意義の消失と、担い手育成を含めた体制が組織化されなかったことが考えられる。また神事と無関係であった点、実施日がなじみのある年中行事日（例えば節分など）ではなかったこともその要因と言える。

「伝説は伝えられる段階で時代性を反映しながら生成、再生されている。そしてその時点での“現代的性”が反映される。時代、地域、地理、環境、社会や文化の状態、それぞれが抱える条件に適応するように異なるものである」（内藤2007：12-16）。内藤の述べる通り、伝説を含む伝承も時間軸や空間軸によって生成変化するものである。日本海各地におけるナマハゲ系の訪問者行事を見ると、同系列であるが、それが伝播された場や時によって様々に変化していったことが窺い知れる。「あまめ」という言葉が中央京都から全国に広がり多様な名称を得ていったように、その行事はその土地や風土に生きる人々、また社会状況によって多様な展開をしていったと思われる。

折口信夫が「小正月或は元日に、妖怪の出て来るのは（中略）なもみはげたか・なまはげ・が

んぼう・もうこなどと言ふ名で（後略）」（折口 1929：18）と「もうこ」の語をあげている。福井県においても「蒙古来攻」伝説³¹や、むかし蒙古から人買い船がやってきたときに村人四人が逃げかくれたという四人山^{よったり}という山がある（杉原：1970：605）など、大陸から帰着した異国人の伝説は数多い。日本海・北ツ海沿岸地域の特性として、異域の人々、特に東アジアからの行き来や来歴が我々の考える以上にあった、ということが言える。

『日本書紀』（544）に記されているように、佐渡にやってきた北方民族・肅慎人^{みしはせ}は「鬼魅^{おに}」と呼ばれ、人々に怖れられた。柳田は「此種族の遠征力の旺盛で、現に日本海の多くの荒濱にも、別に政廳の介助などを須^またずに、移住した前例の有ることである」（柳田 1968 [1920]：218）と書いているが、目的を持った来着者であれ遭難者であれ、異形の人々には受容された者もいれば、恐怖の対象となった者もいた。歴史のなかで蓄積されてきた漂着者の事実が、この訪問者行事の根底にあると思われる。海村であるがゆえに、都度々起こったであろう究極の恐ろしい出来事は鬼と結びつき、後世に残すべく地元の人々に語り継がれた。当行事は文字には残らないが、口承によって伝承された歴史の足跡である。

「ナマハゲ系の儀礼の本質は恐ろしい鬼の来訪に求められるべき」（小松 2000：109）という点が、他の地域よりも本行事の原型に認められることがアッポッシャだといえるだろう。すなわち海浜に生きてきた人々にとって、訪問者は「神霊」でも「祖霊」でもなく、社会秩序に反した異邦人への恐怖そのもの、という点が大きな特徴であると言える。

「アッポッシャ」はこの地域の持つ複数の要素と、外来者―「他者」の行為の中で最も忌避されるべき事柄とがからんで表象された習俗である。人びとは共同体を揺り動かすような事件の記憶をそこに埋め込んだのであり、後に伝承者は先人の「生きて見て感じた」その恐怖の出来事を歳時習俗化することにより、彼らの心性を継いでいった。

人は異質な「他者」に対して受容と拒否という相反した心的構造を持つ。この伝承は最も忌まわしい事件によって地域に生じた他者意識のうち、後者の負の心象が継がれたものであり、また歳時習俗という形態を取ることで、地域住民の結束をはかる役割も果たしてきた。

当伝承の継続に関しては、湯川が述べていた通り、「潜在化」でもって地域住民による、記憶による復活が細々と繰り返されてきた。それが顕在化するのとはどんな時なのだろうか。この事例では1965年から中断していた行事を1983年にサークルの人たちが復活させた。注28で記したようにその復活の7年前(1976年)にアッポッシャが文化祭で上演された。このことが伝承主体に「記憶」を呼び起こし、その後サークル員の子どもにこの行事が必要となり、意味付けがなされて顕在化したのではないか。伝承主体について考えるとき、「伝承母体のなかの集団と個人について、そこに帰属する一個人が抱える個別の事情や行動により、民俗が大きく様相を変えたり、消滅したりすることを自覚する必要がある」（湯川 1998：15-25）のであり、その動きは集団ではなく、個々人での立場が大きく関わっていると考ええる。

伝説を含む伝承とは庶民の土着の歴史であると同時に、共同体の人々をつなぐ機能をも有している。筆者はこの特徴ある行事の復活と継承を望むものである。

現在は停止となっているが、地元の若者の強烈なアッポッシャへの思い出が、いつかその担い

手となって復活へと動くかもしれない。今は潜在期間であるにとらえたい。

注

- 1 茶釜の蓋を鉄棒で叩く。
- 2 地元では訪問者をアマメ（アモメ）さんではなく、アッポッシャという行事名で語ることが多く聞かれた。
- 3 むいかどしとは「六日年越」ともいい、一月六日夕方から七日にかけてをいう。江戸時代には重要な節日と考えられており、七日正月とも呼ばれている。大晦日、十四日年越、節分などとともに年越とされる（『世界大百科事典』項目「むいかどし」：609 田中宣一記述）。「正月六日の夜から七日の朝を重要な折り目とする所が、関東から西日本まで分布」（『民俗学辞典』項目「七日正月」：426 記述者不明）。
- 4 以下行事を表わすアッポッシャについての「」を用いるものとする。また、後述の伊藤の分類においてその例示がカタカナで示されていることに準じ、本稿ではカタカナ表記とする。しかし文献紹介ではそのままの表記記述採用のため、アッポチャ・あっぱっちゃ等、名称や表記に混在のあることを断っておく。
- 5 歳越の晩に神が来臨して祝福を与える行事。男鹿半島において12/31或いは1/15の夜に実施。村の若者が鬼の面をかぶり、藁製のケラミノをつけ、木製の出刃包丁を持って家々を訪れる。囲炉裏に長く当たると火型、火班ができるが、これを日本海沿岸ではナモミ・ナゴミ・アマミ等と呼び、新年に当たり古い火型を剥ぐことが祝福の一つとされた。類似行事は日本海沿岸に分布（『日本民俗大辞典』項目「ナマハゲ」：262-263 稲雄二記述）。
- 6 筆者が実見した年が最後であったがその後中断（2015/2/6月現在）。
- 7 『北中部の民間信仰』（1973）、『福井県史資料編15 民俗』（1984）による。
- 8 図4参照。蒲生町から約6 km北の海村で、人口142人（2014/12/1現在 福井市）。主な生業は漁業。
- 9 「小正月」とは一月十四・五日を中心とした正月をさす。主として東日本にこの名が行われている（『民俗学辞典』項目「小正月」：205-206 記述者不明）。
- 10 伊藤はナマハゲ系として、ナマハゲ・ナモミハギ・ナナミ・モーコ・アマハゲ・アマメハギなどの呼称を記述している。
- 11 加藤和夫監修「あまめ 行事名に残る生活のにおい」『マチかど方言学』より。
- 12 この岩の呼称は間違いで、「大ぐり」（暗礁）である。浜から約80 mの所にあったが、1999年に一帯が埋め立てられた（青木氏からの聞き取り）。
- 13 米とヨモギを共に炊き、円盤状に乾かした保存食。
- 14 1997年1月の「ナホトカ号事件」。隠岐の島沖でロシア船籍重油タンカーの破断事故が起り、海流と季節風にあおられ重油が日本海沿岸を汚染した。後日船首部と船長の遺体が福井県北部海岸に座礁漂着した。
- 15 青木氏と御家族からの聞き取り及び私家本（2014）による。
- 16 日本海各県の教育委員会等に行事の実施状況を往復はがきで送付して調査。
- 17 表は縦書きされたものを筆者が横書きにして表示。表題がなかったため筆者がつけた。
- 18 この表では実施日が1/6であるが、小倉、稲の研究では1/14 2/3 1/31の4種が報告されている。
- 19 戦前は旧暦小正月に実施。昭和27～28年に12/31となった。
- 20 縦書きを横書きにして表示。表題がなかったため、筆者が付けた。なおこの表には記述がないが、行事時の供応は越廼村では餅、能登では餅やミカン、お金など。秋田では酒肴料理各種となっている。
- 21 「あまめん」は筆者の福井県立歴史博物館でのDVD視聴と地元での聞き取りによる。「あっぱっしゃ」の蒲生町も「あまめん」の白浜町も少子化により、訪問軒数は4～5軒にとどまった。
- 22 本来は角あり鬼面である（文献、口碑による）。
- 23 子どもが鬼に豆をぶつける。
- 24 『日本書記』卷第十九欽明天皇五年（544）十二月に「佐渡の北海岸に^{みしほせ}肅慎人（沿海州ツングース系か蝦夷の一部か）が漂着し嶋人は^{おに}鬼魅であると近づかなかった。ある人の占い通り、村人がその鬼にさらわれた。肅慎人は神の靈威がはげしい場所で水を飲んだので、半数が死んだ」という記述がある。
- 25 2014/11/22の聞き取りから。
- 26 越廼村（旧名）における8集落の本社10境内社9あり、そのうちの5社に漂着神伝承がある（青木 1990）。

- 27 文献には蓑の記述がないが、実見時には着用。
28 この再開以前1976年に、村の文化祭で子供会が地域の年中行事紹介として「あっぱっしゃ」を上演。好評を得た（青木氏の私家本及び奥様の話より）。
29 メンバー5人のうち、60歳以上4人、50代半ば1人。
30 文献3, 文献4による。
31 拙稿。2015。「敦賀市五幡の『蒙古来攻伝説』」

引用参考文献

- 青木捨夫。1983。『越廼村の年中行事 あっぱっちゃ 資料』私資料。
青木捨夫。1990。「漂着神考」『北陸の民俗』8：15-16。
青木捨夫。2014。『こしの村物語』とんがり山工房。
伊藤幹治。1963。「稲作儀礼の類型的研究」『国学院大学日本文化研究所紀要』12。
稲雄二。2005。『ナマハゲ 新版』秋田文化出版。
江戸喜久治。1939。「正月行事座談会」『南越民俗』第二巻 第二號：16。
大場卓司。2004。「青森県における小正月の来訪神」『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』3：3-21。
小倉学。1982 [1967]。「アマメハギ」『民俗民芸双書』90（信仰と民俗）岩崎美術社。
折口信夫。1975 [1929]。「国文学の発生」『折口信夫全集』1 中央公論社。
鎌田幸男。1999。「男鹿のナマハゲ」『民具研究』120：23-31。
越廼村編さん委員会。1988。『越廼村誌』こしの村。
小松和彦。1977。「異人論」諏訪春雄他編『訪れる神々一神・鬼・モノ・異人』雄山閣。
小松和彦。2000。「蓑着て笠着て来る者は——」『怪異の民俗学』4（鬼）河出書房。
塩瀬博子。2015。「敦賀市五幡の『蒙古来攻伝説』」『日本口承文芸』38：168-184。
下野敏見。1978。「おとずれ神」大島建彦編『講座 日本の民俗』6（年中行事）有精堂出版。
杉原丈夫。1970。『越前若狭の伝説』松見文庫。
高桑守史。1998。「民俗調査と体碑—伝承の一側面」関一敏編『現代民俗学の視点』2（民俗のことば）朝倉書店。
内藤浩誉。2007。「伝説」日本口承文芸学会編『シリーズ言葉の世界』3（はなす）三弥井書店。
福井県鯖江女子師範学校編。1936。『福井県の伝説』鯖江女子師範学校郷土研究部。
福井県編。1984。『福井県史資料編』15（民俗）福井県。
藤本良致。1992 [1973]。「家と信仰」『北中部の民間信仰』明玄書房。
柳田國男。1968 [1920]『定本柳田國男集』第二巻 筑摩書房。
Yamamoto Yoshiko. 1978. *The Namahage: a festival in the northeast of Japan*. Philadelphia: Institute for the Study of Human Issues.
湯川洋司。1998。「伝承母体とムラの現在」『日本民俗学』216。

辞書事典

- 下中直人編。1988。『世界大百科事典』平凡社。
福田アジオ他編。2000。『日本民俗大辞典』下 吉川弘文館。
民俗学研究所編。1951。『民俗学辞典』東京堂出版。
柳田國男編。1977 [1939]『歳時習俗語彙』国書刊行会。

新聞

『北国新聞』2014.1.30 朝刊.